

# Letter for Members

## 【コンテンツ】

- JPR最新のインパクトファクターは 4.642 ! ..... 1
- 日本老年精神医学会との医科歯科連携研究 ..... 2
- 渉外委員会報告 ..... 3
- 令和3年度定時総会がハイブリッド型で開催 ..... 4
- 第130回記念学術大会 ..... 5
  - 第130回記念学術大会開催
  - 令和3年度専門医研修会報告
  - シンポジウム開催報告
- 受賞者の声 ..... 12
  - 令和2年度学会優秀論文賞
  - 第130回記念学術大会優秀賞
- 補綴関連講座・分野新教授紹介 ..... 23

## JPR最新のインパクトファクターは4.642 !

2021年7月1日に Clarivate Analytics 社より最新のジャーナル・インパクトファクター (JIF) が発表され、本学会の公式英文誌“Journal of Prosthodontic Research (JPR)”の2020年JIF値は『4.642』となりました。昨年のJIF値 (2.662) からの大躍進です。JPRは補綴歯科における世界的なトップジャーナルに留まらず、歯学分野全体でもベスト25%の地位 (Q1) を5年連続で維持しています。主な補綴歯科関連国際雑誌の2020年JIFは以下の通りでした。

Journal of Prosthodontic Research (JIF: 4.642)  
 Journal of Oral Rehabilitation (JIF: 3.837)  
 Journal of Prosthetic Dentistry (JIF: 3.426)  
 Gerodontology (JIF: 2.980)  
 Journal of Prosthodontics (JIF: 2.752)  
 Journal of Advanced Prosthodontics (JIF: 1.904)  
 International Journal of Prosthodontics (JIF: 1.681)

なお、JPR誌は2021年から完全なオープンジャーナルとなり、全ての掲載論文が以下のJ-Stageウェブサイトから自由に読めるようになりました。

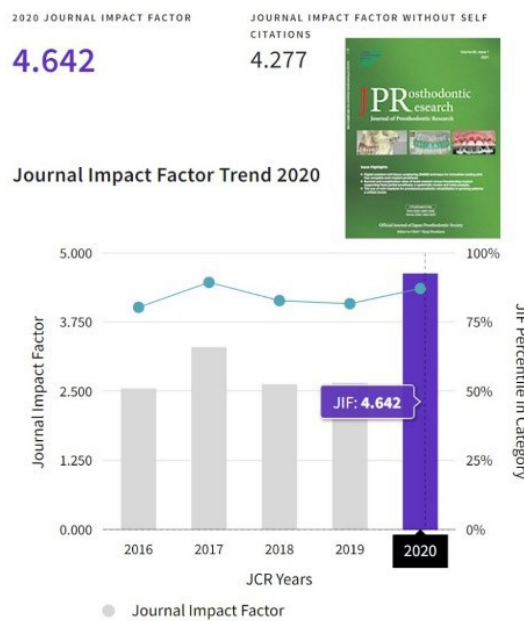
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jpr/-char/ja>

また、昨今のグリーン社会、カーボンニュートラルの実現に向けた流れから、JPR編集委員会では、冊子体の製本部数をできるだけ減らしていく方向性を検討しております。

今後ますますJPRが本学会のグローバルなプレゼンス向上に貢献するよう、会員の皆様と一緒に育ててまいります。

JPRの更なる発展に向け、これからもご協力の程よろしくお願い申し上げます。

(JPR編集委員会 委員長 江草 宏)



## 日本老年精神医学会との医科歯科連携研究

認知症患者への対応ならびに認知症予防は、社会的に極めて重大な課題であり、国の方針として厚生労働省が定めた認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では、歯科医師に認知症対応力の向上が求められています。このような背景から、日本補綴歯科学会では、第124回学術大会(2015年)において、認知症と歯科的対応への理解を図るための臨床シンポジウムを開催しております。さらに、第128回学術大会(2019年)において、「認知症の現状、補綴歯科治療と今後の研究展開」と題するシンポジウムを開催し、口腔機能と認知機能との関連について、認知症の専門学会と共同研究を企画することを提言いたしました。

このような経緯から、第128回学術大会のシンポジウムを企画・運営した私と佐々木啓一先生(東北大)、演者で認知症専門医の眞鍋雄太先生(神歯大)、本学会からは本木克彦先生(神歯大)、上田貴之先生(東歯大)、窪木拓男先生(岡山大)をコアメンバーとした医科歯科連携研究(Medical-Dental collaboration: Exploratory research project on the Correlation between Cognitive and Oral function: ECCO)プロジェクトワーキンググループを結成しました(図1)。

ECCOプロジェクトでは、認知症専門医と補綴専門医が連携し、認知機能と口腔機能の相関についてエビデンスを創出することを目的としております。そこで、医科側のパートナーについては、メンバーの眞鍋先生のご尽力により、日本老年精神医学会理事長の池田学先生(大阪大学)にご参画していただくことになりました。

その後、COVID-19の感染拡大によりプロジェクト活動の中断を余儀なくされましたが、2021年7月からは研究企画推進委員会の事業活動として継続し、9月7日に日本老年精神医学会とECCOプロジェクトのオンラインでの調印式を開催いたしました(図2)。現在、プロジェクト活動の第1弾として、両学会の会員を対象とした、認知機能と口腔との関わりについて臨床経験と自身の考え、医科歯科連携についてのアンケートを実施する準備を進めています。実施の際には、会員の皆様のご協力をいただければ幸いです。

最後に、本プロジェクトの推進に際し、大川周治前理事長と研究企画推進委員会服部佳功前委員長、馬場一美理事長に多大なるご支援とご尽力をいただきましたことにプロジェクトメンバーを代表して感謝を申し上げます。(研究企画推進委員会 委員長 笹木賢治)

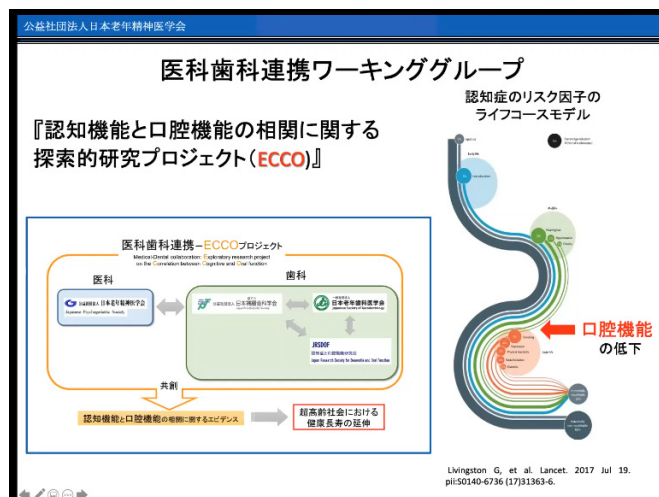


図1 医科歯科連携プロジェクトの概要



図2 オンライン調印式の一場面。左：池田学理事長，右：馬場一美理事長

## 渉外委員会報告

これまで国際渉外委員会の名称でしたが、今期より国内も含めた渉外全般を務めることになりました。重責ですが委員一同精一杯取り組んで参ります。さて渉外委員会から最初のLetter for Membersへの寄稿は、AAP2021終了のご報告と、国内渉外として初仕事の日本臨床歯科学会との連携に関する報告です。

### ● The 12<sup>th</sup> Biennial Congress of Asian Academy of Prosthodontics (AAP) 終了

インドネシア補綴歯科学会の主管で昨年開催予定だったAAPは、COVID-19の影響で1年延期となり、2021年8月15日(日)～9月5日(日)に開催されました。学会は期間中の毎週土日、計7日間に渡り、Main Lectureの19演題は各2時間の講演時間で、非常にボリュームのある内容でした。JPSからは黒嶋伸

一郎先生(長崎大)がInvited SpeakerとしてMRONJの基礎研究に関する講演をされ、また渉外委員会の神野洋平先生(九州大)にはインプラントに関するセッションのモデレーターを務めていただきました。JPS SupportのHiranuma-JPS Award Competitionでは、JPSからエントリーしたSirapat Thongpoung先生(九歯大)とインドネシア補綴歯科学会のIntan Ruspita先生が受賞されました。AAPは隔年開催ですが、今年のインドネシア大会が1年遅れの開催でしたので、今回は来年フィリピンでの開催となります。デジタルがテーマとのこと。コンペティションも含めて詳細がわかり次第アナウンスさせていただきます。また次々回は2024年窪木副理事長が大会長を務め、日本での開催が決定しました。こちらも日程等が決まり次第ご案内致します。



WebでのHiranuma-JPS Award授与式



MRONJに関する研究について講演された黒嶋先生(長崎大)



インプラント骨造成のセッションでモデレーターを務められた神野先生(九州大)

### ● 日本臨床歯科学会(SJCD)との連携協議開始

馬場理事長の「スタディーグループ・歯科医師会も含めた他学協会との連携」の方針のもと、JPSのプレゼンスを高めるための最初のカウンターパートとして日本臨床歯科学会が選択されました。これまで2回の連携協議にて、双方の強みを持ち合い、お互いを尊重しての連携を図ることが確認され、まずは日本補綴歯科学会第131回学術大会(大阪)にて共催シンポジ

ウムを企画することが決定しました。シンポジウムの詳細なコンテンツは、学術委員会を中心に進めていくこととなりますので、是非ご期待ください。さらに今後はプロソでの連携も検討されています。インターディシプリナリーアプローチを基盤として歯科臨床を構築する日本臨床歯科学会との連携は、われわれ日本補綴歯科学会に新たな一面を加えることができるものと思っています。(渉外委員会 委員長 澤瀬 隆)



## 令和3年度定時総会について —Web出席型総会として開催—

令和3年度公益社団法人日本補綴歯科学会定時総会が令和3年6月18日に開催されました。COVID-19感染拡大防止のため、第130回学術大会がWeb開催に変更されたことに伴い、令和3年度定時総会は、東京医科歯科大学での集合型開催を変更し、Web出席型と致しました。令和2年度総会は、集合型に加えてWebでの視聴を可能としたハイブリッド参加型で開催しましたが、本年度は会場を設けず、Webでの視聴、発言、ならびに議決権の行使が可能なWeb出席型として開催致しました。また、社員以外の会員の皆様にもウェビナーを使用して視聴、質問が可能なシステムを構築しました。

本学会の理事会や委員長会などの会議は、昨年3月末よりWebでの開催となっておりますため、Web会議の開催、運営には、総務と事務局も慣れてはいたのですが、280名以上の社員の議決権の行使ならびに社員以外の会員の視聴と質問を行うことから、業者に総会の運営を依頼し、1週間程前には理事・監事・委員長にご参加いただき事前テストを行いました。事前テストでZoomへの入室方法、本人確認、議決時の問題点などを確認して修正しました。

当日は、学会事務局に理事長、副理事長、総務を含

めて数名の理事が参集し、議長はWeb出席型のため事前に日本歯科大学の五味治徳先生にお願いし、司会は総務が担当致しました。入室時の本人確認に時間がかかり、ご出席いただきました社員の皆様にはご迷惑をおかけ致しましたが、無事定時に総会を開始することができました。Web出席型としたため例年に比較し委任状が少なく、少々心配しておりましたが、委任状出席98名、Web出席134名、合計232名(社員総数283名)のご出席をいただき、議決権の行使も順調に行うことができました。次期理事の選任、監事の選任を含めて用意していた議案につきまして承認をいただき、また所掌の理事・委員長からの報告、ならびに社員の皆様からのご質問をいただいたの活発な議論がなされ、本学会としては初めてのWeb出席型総会を無事終了することができました。コロナ禍とはいえ、今年も社員の皆様と直にお会いすることが叶いませんでした。来年は、是非対面での総会が開催されることを祈っております。最後に、議長として円滑に議事を進めていただきました五味先生、ご出席いただきました社員の皆様、本学会会員の皆様にこの場をお借りしてあらためて深く御礼申し上げます。

(前期総務担当 横山敦郎)



総会時のスクリーンショット (佐藤前広報委員長からいただきました)

# 公益社団法人日本補綴歯科学会 第130回記念学術大会

メインテーマ

「食力向上による健康寿命の延伸—補綴歯科の力を示す—」

令和3年6月18日(金), 19日(土), 20日(日)に公益社団法人日本補綴歯科学会第130回記念学術大会を無事に開催することができました。ご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。また大会の開催に際しご高配を賜りました大川周治理事長をはじめ本学会役員の皆様, ご協力を賜りました共催ならびに後援団体の皆様, 運営にご協力いただきました日本旅行, 配信にご協力いただきましたDoctorBookの皆様には厚く御礼申し上げます。

第130回記念学術大会は2年以上前からメイン会場として神奈川県民ホールを確保し, 周辺のポスター会場やサテライト会場も予約し, ハコの準備は万全, と思っていたところに新型コロナウイルスの感染拡大が発生してしまいました。それでも開催時には収まっているのではないかと淡い期待を抱きつつ半年前まで粘っていたのですが, 結局すべてをキャンセルし, Web開催に移行することにいたしました。しかし集合型開催の未練を捨てきれず, イブニングセッションのみ集合型として開催することとし, 皆さんにインフォメーションさせていただきました。しかしながら, 連休直前に緊急事態宣言となり, 結局, 完全Web開催となってしまったことはご存知の通りです。

第129回学術大会は急にWeb開催となってしまったため, あらゆることが初体験で, 古谷野潔大会長や

鮎川保則準備委員長は大変ご苦労されたことと思います。私も学術担当であったためそのご苦労のご様子をみることができました。またこの半年前に日本老年歯科医学会の大会長も勤めさせていただいたため, WEB開催の詳細を経験することができました。これらの経験のおかげで, 第130回記念学術大会はなんとか無事に開催することができました。

みなさまもご承知のようにWEB開催はさまざまなメリットがあります。どこからでも参加できるというメリットはいうまでもありませんが, 今回は集合型開催の会場費が浮いたため, その予算を投入し見逃し配信をすることができました。見れなかったものを見られるのもメリットですが, 興味深いセッションを何度も見ることができる, というのもよいものです。また演者の方々の入魂のプレゼンテーションをアーカイブ化することもでき, これは本会にとっても大変な財産になると考えます。もちろんこれの実現には多くの議論を経なければなりません。

まあでも, やっぱりできることならみんなで集まってやるのがいい。(しつこいですが)横浜では重慶飯店で麻婆豆腐食べ比べを計画していたのですが大変残念です。近々にはコロナが克服され皆が集まって切磋琢磨できるような大会が開催できることを祈りつつ筆をおきます。  
(大会長 水口俊介)



第130回記念パネルディスカッション：歴代の理事長と馬場新理事長で補綴歯科の未来を議論していただきました。



集合写真を取り忘れてしまい, このような食事風景となってしまいました。運営に協力していただいた日本旅行, 配信を担当していただいたDoctorBookには大変お世話になりました。



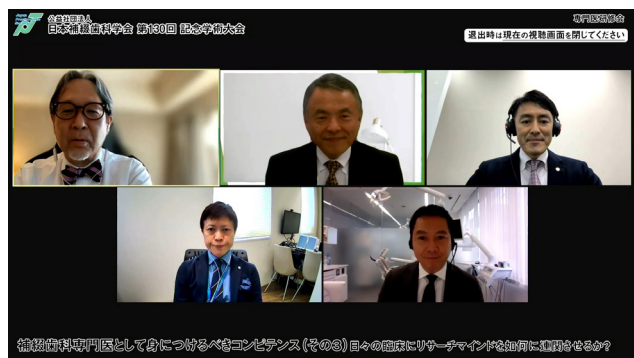
### ●令和 3 年度専門医研修会報告

令和 3 年 6 月 20 日 (日) 教育問題検討委員会飯沼利光委員長 (日本大) と専門医制度委員会河相 (日大松戸) 座長のもと行われました。研修会のメインタイトルを「補綴歯科専門医として身につけるべきコンピテンス (その 3) 日々の臨床にリサーチマインドを如何に連関させるか?」と題し、3 名の先生に講演をいただきました。「補綴歯科専門医が身につけるべきコンピテンス」を解説するシリーズは第 128 および第 129 回で行われた続編で、今回で最終回となります。

講演に先立ち、河相の方から補綴歯科専門医の臨床において「Art」に加え「Science」を強化して身につける必然性と EBM を実践するために「リサーチマインド」を有することの意義について概説しました。その後、大学に在籍する研究者・臨床医の立場から金澤学先生 (医歯大) に「症例から学ぶ Evidence-Based Medicine (根拠に基づく医療) の基本」と題しご講演をいただきました。講演内容は EBM の 5 つのステップの概説と「無歯顎患者への全部床義歯補綴において、軟質裏装材を用いた全部床義歯は、硬質レジン床を用いた全部床義歯と比べて患者満足度が向上するか」という Clinical Question を具体例にして、EBM による解決法を実際の症例を交えながら解説いただきました。次に、「スタッフのリサーチマイン

ドを育くむ取組み」として勤務医の立場から鈴木秀典先生 (関西支部) にご講演をいただきました。鈴木先生からは、歯科衛生士をはじめとしたパラデンタルが能動的に日常臨床の疑問を定式化して、文献などから情報を検索することに加え、これに補綴歯科専門医も加わり関連情報から解決を探るプロセスの環境づくりについてご紹介をいただきました。最後に、「専門医としての開業医における EBM 実践」として開業医の立場から中居伸行先生 (関西支部) にご講演をいただきました。中居先生には、GP として実践している EBM の具体的方法論や、日々のリサーチマインドを喚起して維持するための情報収集の方法、臨床でエビデンスをどのように最終的な意思決定に結びつけているのかなど、患者との双方向コミュニケーションを含めて解説いただきました。

学術大会の最終プログラムであるにもかかわらず、専門医更新予定者ならび専門医申請予定の方々 1,446 名の方にご視聴をいただき、また多くの質問をいただきました。お三方の先生が日々携わっているリサーチマインドを駆使した補綴歯科臨床やスタッフの育成が補綴歯科専門医の「Art」と「Science」の向上にお役に立てると確信できる有意義な研修会でありました。(日大松戸 河相安彦)



専門医研修会当日の座長 (河相・飯沼) および講師 (金澤・鈴木・中居)



事前打ち合わせ時のスクリーンショット

## ●シンポジウム開催報告

第130回記念学術大会では12題のシンポジウムが企画されました。Web開催ではありませんでしたが、オンデマンド配信に対応し、集合型開催にはないメリットもありました。新しい試みにも柔軟に対応された座長の先生に、その内容について振り返っていただきました。

### ●メインシンポジウム 1

一般社団法人日本接着歯学会共催

「審美修復材料を極めるー基礎から臨床まで」

座長：正木 千尋（九歯大）

小峰 太（日本大）

シンポジスト：峯 篤史（大阪大）

高垣 智博（朝日大）

猪越 正直（医歯大）

大谷 一紀（東京支部）



近年、臨床で使用する機会が増加している各種審美修復材料に関するそれぞれの材料特性や臨床応用への注意点など長期予後を得るための留意点について、研究、臨床における第一人者である4名の先生方から解説していただきました。グローバルスタンダードを考えるだけでなく、フッ化水素酸が使用しづらいなど日本の事情に合わせたそれぞれの接着術式も整理していただき、臨床に直結するとても有意義なセッションとなりました。また、ライブでの質疑応答では、とても多くの質問が寄せられ、あっという間のディスカッションでした。

### ●メインシンポジウム 2

「多角的な視点から食力を考える」

座長：細川 隆司（九歯大）

大川 周治（明海大）

シンポジスト：飯島 勝矢（東京大）

米永 一理（東京大）

池邊 一典（大阪大）



本シンポジウムでは、単に食べる力あるいは口腔機能というだけでなく、食欲改善や食環境の改善、栄養指導などの支援を含めた「食力」について、医科からはフレイル研究の第一人者である東京大学の飯島勝矢先生と「イートロス」の提唱者であり、医科・歯科のダブルライセンスでご活躍の米永一理先生、また、歯科からは大阪大学池邊一典先生にご講演いただきました。今後、超高齢社会の中での医科歯科連携を含めた補綴学会の方向性を考えるうえで非常に有意義なセッションとなりました。

## ●シンポジウム 1

「パーシャルデンチャーデジタル化への現状と課題」

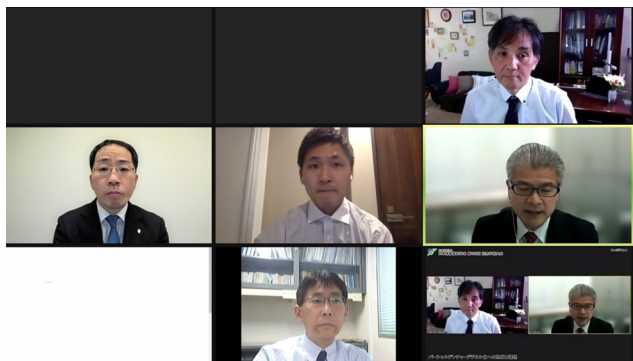
座長：若林 則幸 (医歯大)

大久保力廣 (鶴見大)

シンポジスト：西山 弘崇 (昭和)

田坂 彰規 (東歯大)

笹木 賢治 (医歯大)



本セッションでは、パーシャルデンチャーの製作プロセスをフルデジタル化するための最先端の取り組みについて、シンポジストから所属分野での研究成果を余すことなく共有していただきました。シンポジウム後は、オンライン会場から多くのコメントが投稿され、各シンポジストがこれらにすべて回答する形で、時間いっぱいまで活発に議論が繰り広げられました。そして、パーシャルデンチャーのデジタル化に伴う課題や問題点は、事前に考えられたよりも研究者間で共通していることが明らかとなり、この分野の研究の方向性が示唆されたと考えています。

## ●シンポジウム 2

「補綴医に必要な覚醒時ブラキシズムの検査と診断」

座長：菅沼 岳史 (昭和)

西山 暁 (医歯大)

シンポジスト：山口 泰彦 (北海道)

藤澤 政紀 (明海)



本シンポジウムでは、覚醒時ブラキシズムの検査、診断に精通した北海道大学の山口泰彦先生と明海大学

の藤澤政紀先生に、補綴医として知っておきたい覚醒時ブラキシズムの検査、診断、対応法および睡眠時ブラキシズムとの関連について解説していただきました。各講師に対する会員からの質問も多数いただき、活発な質疑応答ができました。また、シンポジウム終了後の座長とシンポジストの先生方とのディスカッション（配信されていません）も大変盛り上がりしました。最後に、抄録に不備があり、山口先生をはじめ大会関係者に多大なご迷惑をおかけしましたことを、ここに改めてお詫び申し上げます。

## ●シンポジウム 3

「歯を守る修復治療 歯根破折を起こさないために」

座長：小峰 太 (日本)

渡邊 恵 (徳島)

シンポジスト：神戸 良 (京都府開業)

坪田 有史 (東京支部)



本シンポジウムでは、歯内治療から歯冠修復にいたる一連の治療の流れとトラブルについて、神戸 良先生と坪田有史先生に講演していただきました。今年は講演が事前録画だったため、講師の先生方にはお手間をおかけしましたが、講師、座長共に当日の負担は少なかったように思います。昨年と比べて Web 開催にも慣れ、大きなトラブルもありませんでしたが、このシンポジウムの売りであった歯内治療と歯冠修復の mingle 感が薄くなってしまった点に関しては、やはり現地集合型開催の強みを感じさせられました。



## ●シンポジウム 4

「義歯洗浄剤、洗浄システムの適応と効果」

座長：二川 浩樹（広島大）

村田比呂司（長崎大）

シンポジスト：河相 安彦（日大松戸）

福西 美弥（昭和大）

二川 浩樹（広島大）



本シンポジウムでは、河相安彦先生より多くの文献から得られた義歯ケアに関するエビデンスを、ついで福西美弥先生よりタンパク吸着抑制機能をもつ義歯コーティング材の開発について、最後に二川浩樹先生よりデンチャープラークの概念と義歯洗浄剤の特徴や効果的な使用方法を解説していただきました。義歯ケアの重要性、理論と実践、そして研究に至るまで幅広く網羅し、明日からの臨床にも役立つ内容でした。本シンポジウムの企画担当の谷田部 優先生のきめ細かいコーディネートにより、講演の準備から実施までスムーズに行うことができました。（文責：村田比呂司）

## ●シンポジウム 5

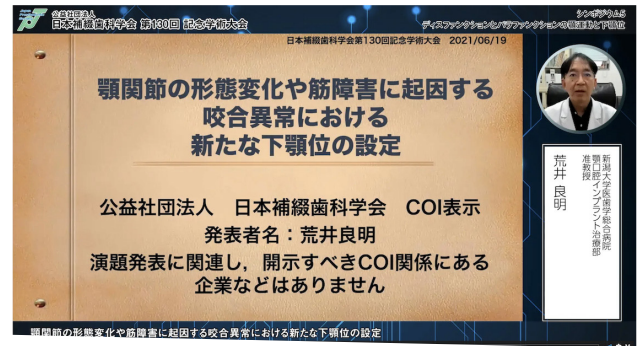
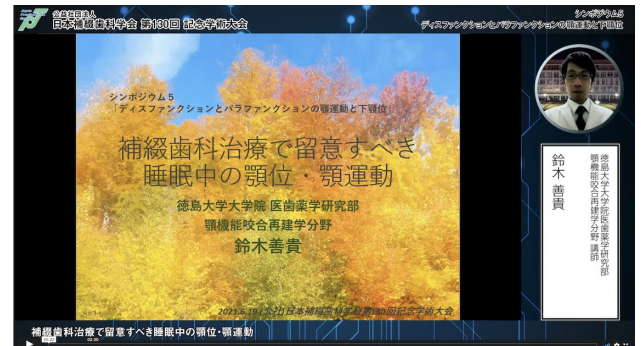
「ディスファンクションとパラファンクションの顎運動と下顎位」

座長：菅沼 岳史（昭和大）

小川 匠（鶴見大）

シンポジスト：荒井 良明（新潟大）

鈴木 善貴（徳島大）



本シンポジウムでは、通常とは少し異なった視点で、徳島大学の鈴木善貴先生に睡眠時ブラキシズム（パラファンクション）における顎運動と下顎位について、新潟大学の荒井良明先生に咀嚼筋や顎関節の機能障害（ディスファンクション）における顎運動の変化と新たな下顎位の設定について解説していただきました。強力な裏番組で視聴者の数も少なく、皆様からの質問もありませんでしたが、座長の小川先生の進行で上手にまとめていただき無事終了することができました。

## ●シンポジウム 6

公益社団法人日本口腔インプラント学会共催

「バイオマテリアルの限界とインプラント治療」

座長：澤瀬 隆（長崎大）

鮎川 保則（九州大）

シンポジスト：高橋 哲（東北大）

中原 賢（日歯大新潟）

神野 洋平（九州大）



本セッションは研究者かつ臨床家である方を講師としてお招きして Bench to Clinic の最前線をご紹介いただくことを主眼に企画し、高橋先生にはボナークの開発について、中原先生には垂直的骨造成について、神野先生には材料による治療基本手技のカバーの可能性について御講演いただきました。コロナ禍で会場の生きた反応を得られないのは残念でしたが、充実した企画となったと思います。Zoom による事前うち合わせや当日の操作も皆さん慣れていらっしやったのでスムーズに行うことができました。このような基礎研究のセッションは JPS の特色であり、今後も継続的に実施していただきたいと思ひます。

### ●シンポジウム 7

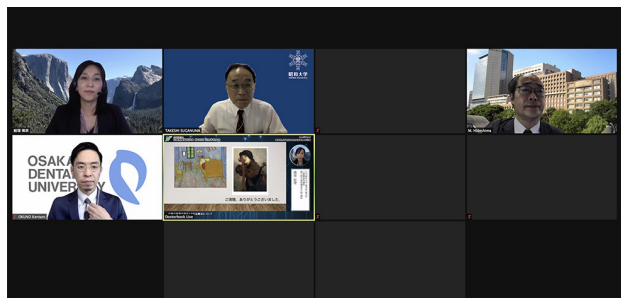
特定非営利活動法人日本睡眠歯科学会共催  
「睡眠時無呼吸症の口腔内装置による治療」

座長：秀島 雅之 (医歯大)

菅沼 岳史 (昭和大)

シンポジスト：奥野健太郎 (大歯大)

榎原 絵理 (九歯大)



本シンポジウムでは、大阪歯科大の奥野健太郎先生に閉塞性睡眠時無呼吸症候症 (OSA) の病態や症状、検査、歯科医師が睡眠医療を行うのに必要な知識や“顎口腔咽頭形態”の評価方法について、九州歯科大の榎原絵理先生に OSA に対する歯科からのアプローチである口腔内装置の適応とその治療法について解説していただきました。前日に 2 つのシンポジウムの座長を経験していたこともあり、スムーズに進行することが

できました。また、視聴者からも多くの質問をいただき、このテーマに対する皆様の関心の高さを伺い知ることができました。

### ●シンポジウム 8

特定非営利活動法人日本顎咬合学会共催  
「アップデート咬合論」

座長：小野 高裕 (新潟大)

小川 匠 (鶴見大)

シンポジスト：中村健太郎 (東海支部)

吉見 英広 (東京支部)

田中 秀樹 (九州支部)



咀嚼機能の維持・回復の重要性が一段と高まっているにも関わらず、歯科補綴学における「咬合論」はむしろ等閑視される傾向にあるところにこのテーマ！…企画を聞いた当初は座長 2 名もいささか不安を覚えておりました。怖いもの見たさでこのシンポジウムを覗かれた方もおられたはずですが、3 人の講師の先生方の熱くそして真摯なお話を聴くうちに咬合を論じることの重要性を再認識できたのではないのでしょうか。コーディネーターの鮎川教授 (九州大) の目論見はズバリでした。さて、今後「咬合論」がどう語られていくか、大いに楽しみです。

## ●シンポジウム 9

「インプラントの連結様式を再考する」

座長：馬場 俊輔（大歯大）

大久保力廣（鶴見大）

シンポジスト：中野 環（大阪大）

中島 康（大歯大）

飯島 俊一（東歯大）



本シンポジウムではインプラントの連結様式に関して、ボーンレベルタイプのプラットフォームスイッチタイプ、ティッシュレベルインプラントのコンバージェントタイプ、およびエクスターナルインターロックタイプについての臨床的考察がなされました。適応症について、ボーンレベルタイプではオールラウンドに適応されるがアバットメントの着脱回数や長期的に連結部の緩みに注意することが重要であると結論づけられました。またティッシュレベルインプラントのコンバージェントタイプでは骨造成を伴う症例においては完全閉鎖に難があり、抜歯即時埋入が適応症と示唆されました。エクスターナルインターロックタイプにおいては、その直径の細さから骨造成を避けることができ審美領域にも適応できるというコメントもありました。最後にそれぞれの演者から各連結様式に対する利点欠点が整理され活発な質疑応答がなされ、何れの連結様式においてもマイクロギャップおよびマイクロムーブメントが重要である旨が結論づけられました。今後のさらなるエビデンスを期待するところです。

## ●シンポジウム 10

先端歯学国際教育研究ネットワーク共催

「先端歯学研究のあり方から歯科補綴学を考える」

座長：江草 宏（東北大）

窪木 拓男（岡山大）

シンポジスト：村上 伸也（大阪大）

石丸 直澄（徳島大）

窪木 拓男（岡山大）



シンポジウム直前の打合せの様子

本シンポジウムは、先端歯学国際教育研究ネットワークと連携し、『先端歯学研究のあり方から歯科補綴学を考える』をテーマに開催されました。本ネットワークは、歯科領域の第一線教育研究者の集約的連携を図り、わが国の基礎および臨床歯学の教育研究を世界の最先端に伍する水準に維持することを目的とする組織であり、村上伸也議長（大阪大）ならびに石丸直澄副議長（徳島大）より、臨床歯学および基礎歯学の観点から、近年の先端歯学研究の動向および今後のあり方についてお話を伺いました。続いて本会における先端研究の取り組みおよび歯科補綴学研究のビジョンについて、窪木拓男副理事長（岡山大）より紹介いただき、ディスカッションを通じて歯学全体が向かおうとするマスタープランや、それを支える先端の基礎研究を知ることで、会員の皆様と歯科補綴学にとっての次世代研究を考える機会となりました。

（江草 宏，窪木拓男）



## 令和 2 年度学会優秀論文賞, 第 130 回記念学術大会優秀賞 受賞者の声

### 令和 2 年度 優秀論文賞



#### 松香芳三 (徳島大)

The role of chemical transmitters in neuron-glia interaction and pain in sensory ganglion

Neurosci Biobehav Rev 2020; 108: 393-399.

この度は、令和 2 年度優秀論文賞を賜りまして大変光栄に感じております。理事長をはじめ、選考いただきました先生方に感謝を申し上げます。

補綴歯科治療において、口腔内感覚は非常に重要であり、治療の成否に関係しています。私は、痛みをはじめとする口腔内感覚の神経伝達メカニズムの研究を継続しておりますが、補綴歯科学において、神経伝達メカニズムの研究も重要であることをご理解いただけますと幸いです。

感覚情報の変化を引き起こし、その異常感覚の継続に関与している神経免疫系の研究を、多分野の研究者が行っています。感覚神経節には、神経シナプスが存在しませんが、細胞間同士で感覚情報を伝達していることが、われわれの研究や他の研究室からの研究により、理解されるようになりました。また、末梢神経が障害されることにより、感覚神経節では神経伝達物質や神経節細胞から産生される炎症性物質などのモジュレーターが、ニューロン間、あるいはニューロンとグリア細胞間の相互興奮を引き起こし、感覚情報伝達に影響を与えることが理解されつつあります。今回の受賞論文では、感覚神経節内の神経伝達物質またはサイトカインのニューロンやグリア細胞からの遊離による感覚情報の伝達を調査しました。特に 1) 痛みなどの感覚異常における感覚神経節ニューロンから遊離される神経伝達物質の役割、2) ニューロンとグリア細胞間の相互作用、3) 感覚情報伝達におけるサイトカインの役割などに焦点を当てました。

この受賞を糧にしまして、今後も国民の健康増進に寄与し、本学会の発展に貢献したいと希望しております。

### 令和 2 年度 学会奨励論文賞



#### 中谷早希 (大阪大)

Effectiveness of pretreatment with phosphoric acid, sodium hypochlorite and sulfinic acid sodium salt on root canal dentin resin bonding

J Prosthodont Res 2020; 64: 272-280.

この度は令和 2 年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じません。

本論文は歯冠部象牙質と比較して接着が困難であるとされる根管部象牙質の接着技法を改善することを目的とした研究です。象牙質に対するリン酸処理、次亜塩素酸ナトリウム処理、および還元作用を有するスルフィン酸ナトリウム処理の効果について、微小引張接着試験、SEM 観察、XPS 分析、そしてラマン分析による検討を行いました。その結果、リン酸処理に続く次亜塩素酸ナトリウム処理に加えてスルフィン酸ナトリウム処理を行うことで高い接着強さが得られること、またスルフィン酸ナトリウム処理は象牙質表面の次亜塩素酸ナトリウムの残留によって低下したアドヒーズプレジンの重合度を向上させることが明らかとなりました。これまでも次亜塩素酸ナトリウムが象牙質とレジンの接着強さに悪影響を与えることは報告されていましたが、実際にアドヒーズプレジンの重合度を測定した研究はありませんでした。この受賞を励みに、今後もさらに邁進していきたいと思います。

最後になりましたが、本研究に際して多大なる御指導を受け賜りました矢谷博文名誉教授ならびに日々研究の御指導をしていただきました峯 篤史先生に厚く御礼申し上げます。また、数多くの助言や協力をいただいた研究室や医局員の先生方に心より感謝申し上げます。



### 古賀小百合 (九州大)

Oral health-related quality of life and oral hygiene condition in patients with maxillofacial defects: A retrospective analysis

J Prosthodont Res 2020; 64: 397-400.

この度は、令和2年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。ご選考くださいました諸先生方に心より感謝申し上げます。

本論文は、口腔がんの手術により顎欠損を有する患者の口腔関連 QoL と口腔衛生状態に関する報告です。近年、われわれは顎補綴治療を行う際に、退院後も良好な口腔衛生状態を築けるよう、患者にその重要性を説明し、歯科衛生士と協力して口腔衛生指導と口腔ケアに取り組んでおります。それらの効果を検証するため、口腔関連 QoL を Oral Health Impact Profile (OHIP)、口腔衛生状態を Plaque Control Record (PCR) で数値化し、顎補綴治療と口腔衛生指導の介入前後での比較を行いました。また、各スコアと年齢、残存歯数、咬合支持数、およびオクルーザルユニット (OU) との相関関係、OHIP と PCR の相関関係を分析しました。その結果、顎欠損を有する患者に対する顎補綴治療は口腔関連 QoL の改善に有効であること、その改善には年齢と OU が影響することが明らかになりました。一方で、口腔衛生指導と口腔ケアは患者の年齢、残存歯の状態、顎義歯の状態など口腔関連 QoL の程度によらず、口腔衛生状態を改善するのに有効であることが明らかになりました。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座クラウンブリッジ補綴学分野の古谷野 潔特任教授、荻野洋一郎准教授、推薦していただきました鮎川保則教授、本研究にご協力、ご助言を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



### 本田順一 (日本大)

Fracture loads of screw-retained implant-supported zirconia prostheses after thermal and mechanical stress

J Prosthodont Res 2020; 64: 313-318.

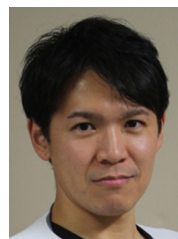
この度は、令和2年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞を賜り、大変光栄に存じます。

ジルコニアは審美性、生体適合性、および機械的特性に優れた材料であり、補綴装置の材料として広く臨床応用されています。一方で、歯根膜支持と比較して、インプラント支持では、技術的偶発症として前装陶材の微小破折が多く報告されています。これまで、微小破折を防止する方法として、前装材料として陶材の代わりに間接修復用コンポジットレジンを用いる方法や単層構造のジルコニアを用いる方法について研究を行ってまいりました。本研究は、これらの方法を用い、加速劣化試験後のスクルー固定式インプラント支持ジルコニア補綴装置の破壊強度について研究を行いました。また、本研究では、micro-CT を応用し加速劣化試験中の補綴装置の状態を非破壊的に観察しました。その結果、間接修復用コンポジットレジンを用いる方法は、加速劣化試験中に前装部に発生した亀裂と、実際に破壊された界面が異なることが観察されました。この結果より、前装材料の種類によって、破壊に至るメカニズムが異なる可能性が示唆され、補綴装置の設計に新たな知見を与えるのではと考えております。

最後になりましたが、本研究に際して、多大なるご指導を賜りました日本大学歯学部歯科補綴学第Ⅲ講座の松村英雄教授ならびに小峰 太准教授をはじめ、ご協力くださった先生方に厚く御礼申し上げます。



### 八田昂大 (大阪大)



Occlusal force predicted cognitive decline among 70- and 80-year-old Japanese: A 3-year prospective cohort study

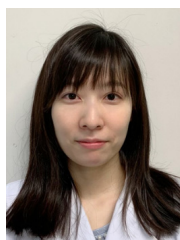
J Prosthodont Res. 2020; 64(2): 175-181.

この度は、令和2年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、認知症患者の増加は世界的な問題であり、世界有数の超高齢社会であるわが国においても、2015年に認知症患者数は462万人に上ると厚生労働省は発表しており、社会全体の課題となっています。しかしながら、認知症の根本治療はないとされるため、認知機能低下の危険因子の特定と抑制が重要とされています。

本論文は、大阪大学大学院歯学、医学系、人間科学研究科、東京都健康長寿医療センター研究所、慶応大学医学部が共同で行っているSONIC研究で得られた結果をまとめたものになります。70歳80歳の高齢者860人を対象に、3年間の縦断研究を行い、咬合力と認知機能低下との関連を一般化推定方程式により検討しました。その結果、咬合力の維持は、認知機能を高く維持できることが示されました。また、咬合力と時間経過の交互作用の検討を行った結果、咬合力の維持は、認知機能低下を緩やかにすることが示されました。この受賞を励みにし、さらなる検討を重ね、補綴歯科治療による機能回復が、認知症予防の一助となることを示していきたいと考えております。

最後になりましたが、本研究に際して多大なるご指導を受け賜りました池邊一典教授ならびに研究遂行にあたり数多くの助言やご協力いただきました諸先生方に厚く感謝申し上げます。



#### 楠本友里子 (昭和大)

Impact of implant superstructure type on oral health-related quality of life in edentulous patients

Clin Implant Dent Relat Res 2020; 22(3), 319-324.

この度は、令和2年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、口腔関連QoLに代表される患者立脚型のアウトカムを用いた研究が注目されており、さまざまな補綴装置の口腔関連QoLが検討されてきました。しかし、無歯顎患者を対象としたimplant fixed complete dentures (IFCDs) と implant overdentures (IODs) の比較については、患者背景の違いやサンプル数等の問題から、現在まで結論は得られておりません。そこでわれわれはこれらの問題を解決しながら、上下無歯顎患者の口腔関連QoLをOral Health Impact Profile (OHIP) のサマリースコア、および4つのディメン

ジョンスコアを用いて検討しました。その結果、サマリースコアを指標とした場合、IFCDs と IODs は近似した口腔関連QoLが得られること、しかし4つのディメンジョンのうち口腔機能、特に咀嚼に関する困りごとについてはIFCDsの方が優れていることが明らかとなりました。本研究結果は低侵襲の治療が求められる超高齢社会において、治療法を検討する際に大きな示唆を与えるものと考えております。今後も当分野の発展に貢献できるよう、研鑽を積んで参ります。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました本学歯科補綴学講座の馬場一美教授をはじめ、多大なる御助言や御協力を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

### JPR Best Paper Award 2020 (Review article category)



#### 小泉寛恭 (日本大)

Application of titanium and titanium alloys to fixed dental prostheses  
J Prosthodont Res 2019; 63: 266-270.

この度は、JPR Best Paper Award 2020 に選出いただきありがとうございます。

受賞に際して、査読、選考にたずさわられたすべての方々に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

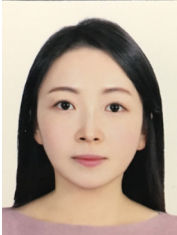
本論文は、チタンおよびチタン合金の固定性補綴装置への臨床応用について、関連のある論文を収集し、まとめたものです。特にチタンの歯科鑄造に関して詳記し、アルミン酸塩系マグネシア埋没材と水平遠心鑄造機の組み合わせが最善であることを報告いたしました。本邦では、チタンの臼歯部クラウンが保険収載されたことにより、チタンを臨床で使用する件数も増加すると思います。その際にこの総説論文が、チタン臨床のエビデンスになればと考えています。

今回受賞を励みに、歯科材料の研究を行うことにより、補綴治療の進展に貢献できるよう努力していきたいと思っております。

最後になりますが、本研究に際してご指導賜りました米山隆之教授、河合達志教授ならびに研究に協力していただいた諸先生方に心より感謝申し上げます。



JPR Best Paper Award 2020  
(Original article category)



Ji-Young Sim (Korea Univ.)

Ji-Hwan Kim (Korea Univ.)

Comparing the accuracy (trueness and precision) of models of fixed dental prostheses fabricated by digital and conventional workflows  
J Prosthodont Res 2019; 63: 266-270.



It is a great honor to be selected as the winner of the JPR Best Paper Award 2020. I am deeply grateful to the recommenders and judges who gave me such an honor.

This study is a new digital exploratory study for the evaluation of accuracy based on conventional workflows beyond the analog boundaries of the existing dental studies. I think that it has found its important meaning in that it identified the possibility of using it in the field of dental prosthetics through data evaluation. And winning the JPR Best Paper Award 2020 gave me great encouragement and stimulation, and I felt the power of positivity more than anything else. We will cherish and remember this fact as a 'commemorative' for a long time. Once again, I would like to express my sincere gratitude and wish for the endless development of this society.



第 130 回記念学術大会  
課題口演賞



秋山 洋 (医歯大)

カスタムプレートを用いたフルデジタル部分床義歯製作方法の開発

この度は、日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大

変光栄に存じます。

近年、歯科領域でのデジタル技術の発展により、全部床義歯だけでなく部分床義歯の製作においてもさまざまな方法が開発されております。しかし、現在のデジタル部分床義歯製作では人工歯やクラスプ、義歯床を手で接着させる必要があるといった、フルデジタル化に向けた課題がありました。そこで、われわれが考案しました、デジタル全部床義歯製作における既製人工歯と義歯床を一塊構造として切削加工するカスタムディスク法を、部分床義歯製作に応用することを検討しました。本研究では、下顎大白歯一歯欠損症例を対象とし、既製人工歯と 3D プリントしたメタルフレーム、義歯床を一塊構造として切削加工しフルデジタルでの部分床義歯の製作を行いました。結果としては模型上での適合も良好であり、これにより従来の課題を解決した、新たな部分義歯製作方法を提案することが出来たと考えております。今後はさまざまなケースでの部分床義歯製作に応用し、その精度検証や最適な加工プログラムの構築を行っていく所存です。

最後になりますが、本研究の機会を与えてくださいました本学部分床義歯補綴学分野の若林則幸教授、高齢者歯科学分野の水口俊介教授、口腔デジタルプロセス学分野の金澤 学教授をはじめ、多大なるご指導ご鞭撻を賜りました諸先生方に深く御礼申し上げます。



飯泉亜依 (昭和大)

歯科用ラボスキャナーを用いたスプリントに生じた摩耗の三次元的評価



この度は、日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大

変光栄に存じます。

睡眠時ブラキシズム (以下 SB) による過大な咬合

力は歯や歯周組織など顎口腔系の諸器官にさまざまな障害や補綴装置の破損を引き起こす可能性があると考えられています。臨床現場では、口腔内所見や問診のみでSBの診断を行うことから、SBを正確に診断し、患者個々のSBの重症度や頻度を評価するのは難しいと考えられています。そこで、私たちはSB管理のために広く用いられるオクルーザル・スプリントに生じる摩耗の様相がSBの病態を反映している可能性があるのではないかと考えました。本研究より、デジタル技術を用いたスプリント咬合面の形態解析により、摩耗部位の視覚化、最大摩耗深度、摩耗面積、摩耗体積の経時的变化の定量的評価が可能となり、Portable PSGを用いたSB筋活動との関連性を解析した結果から、摩耗面積がSBの強度ならびに持続時間を反映している可能性が示唆されました。これが今後SB臨床診断の一つの評価方法として臨床に貢献出来れば幸いと考えております。最後に、本研究の成果を発表させていただく機会を与えてくださった本学歯科補綴学講座の馬場一美先生、田中晋平先生をはじめ、多大なるご指導ご鞭撻を賜りましたデジタルチームの先生方に厚く御礼申し上げます。



#### 内田博文 (医歯大)

口腔内装置は睡眠時ブラキシズムから部分床義歯の支台歯を守るか？  
パイロット RCT

この度は、日本補綴歯科学会第130回記念学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。本研究は、睡眠時ブラキシズムを有する可撤性部分床義歯 (RPD) 装着患者を対象とし、支台歯の動揺度を調べた研究です。部分歯列欠損患者の治療の選択肢として日常の臨床でRPDを選択する場合は少なくありません。RPDは誤嚥性肺炎のリスクや粘膜の休息などの理由で原則、夜間は非装着となりますが、睡眠時ブラキシズム (SB) を有する場合、残存歯へのストレスが懸念されます。また、歯の喪失に関して動揺度とSBの関係が数多く報告されており、本研究では非盲検化ランダム化並列2群間比較研究とし、夜間用義歯装着群と非装着群に分け支台歯の動揺度の変化を観察しました。

本研究の結果では夜間用義歯装着群の支台歯では動揺度の低下を、非装着群の支台歯では動揺度の増加を認め、各群間の動揺度に有意差を認めました。6カ月

という短い観察期間ですが今後はより長期的な観察を行い、残存歯の予後の評価、夜間用義歯を装着することでの Downsides の評価、評価者への盲検化などの研究デザインの改善なども行っていこうと思います。最後に本研究の遂行にあたり、ご指導を賜りました東京医科歯科大学部分床義歯補綴学分野の若林則幸教授、和田淳一郎助教、同歯周病学分野の水谷幸嗣助教に厚く御礼申し上げますとともに、本研究にご協力、ご助言をいただきました先生方に深謝いたします。



#### 大竹涼介 (医歯大)

カスタムディスク法を用いたデジタル全部床義歯の患者満足度と費用分析

この度は、日本補綴歯科学会第130回記念学術大会におきまして課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、さまざまな方法でデジタル技術を応用したデジタル全部床義歯が多く開発されるなかで、ミリングによる全部床義歯は、既に重合されているレジンブロックから切削加工するため、義歯床の機械的物性が良好でレジンの重合収縮の影響を受けないことが報告されています。当分野では、既製人工歯を埋入した義歯床用レジンディスクを患者毎に製作し、義歯を切削加工する新たなデジタル全部床義歯製法 (以下、カスタムディスク法) を開発しました。カスタムディスク法によって、現在のデジタル全部床義歯の問題点であった、人工歯と義歯床の接着強度や人工歯の位置ずれが生じる可能性などの問題を解消でき、さらに、既製人工歯を使用するため、審美性や耐摩耗性も従来通りの結果を得ることができると考えられます。本研究では、カスタムディスクを用いた前向き臨床研究により、患者満足度が有意に改善し、良好な結果を得ることができました。今後、全部床義歯製作のデジタル化が進むうえで、一つの選択肢としてカスタムディスク法を検討する際の有益なエビデンスとなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本研究のご指導・ご助力を賜りました本学口腔デジタルプロセス学分野の金澤 学教授をはじめ、ご協力いただきました研究チームの先生方、そして被験者の方々に厚く御礼申し上げます。





### 三海晃弘 (岡山大学)

薬剤関連顎骨壊死様モデルマウスにおける E-rhBMP-2 の治療効果の検討

Effect of E-rhBMP-2 Local Delivery in a MRONJ-Like Mouse Model

この度は、日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会におきまして、課題口演賞にご選出していただき、大変光栄に存じます。

われわれは、本邦初の rhBMP-2 製剤承認に向け、大腸菌発現系由来 rhBMP-2 (E-rhBMP-2) の開発に成功し、 $\beta$ -TCP をキャリアに用いた E-rhBMP-2 含有人工骨の開発を進めてきました。そして 2021 年 7 月より、本品を用いた顎骨再生療法に関する医師主導型治験を AMED 令和 3 年度臨床研究・治験推進研究事業の支援を受け開始しました。一方、薬剤関連顎骨壊死 (MRONJ) の発症メカニズムは不明な点が多いものの、血管新生や破骨細胞活性の過度な抑制とそれに伴った骨代謝活性の低下が一因であると考えられています。そこで、血管新生や骨代謝を活性化することが知られている E-rhBMP-2 を応用することで、明確な治療法が確立されていない MRONJ の治療が可能ではないかと考えました。実際に、MRONJ 様病変モデルマウスを用いて E-rhBMP-2 の効果を検討した結果、無処置群では抜歯窩の骨性治癒を認めませんでした。E-rhBMP-2 移植群では抜歯窩の骨性治癒を認め、抜歯窩の治癒の程度は、通常の抜歯窩と類似していました。本結果は E-rhBMP-2 が MRONJ の治療に有効である可能性を示唆しており、今後、現在開発中の E-rhBMP-2 含有人工骨の MRONJ 治療への適応拡大に向け、大型動物を用いた非臨床試験を実施していく予定です。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただきました岡山大学学術研究院・医歯薬学域インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、分子医化学分野の大橋俊孝教授、大野充昭准教授に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり、多大なるご協力、ご助言をいただきました当分野の先生方に深く感謝いたします。



### 駒走尚大 (鹿児島大学)

顎骨骨髓由来間質細胞の骨形成能判定のためのマーカー探索

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会におきまして課題口演賞に選出してい

ただき、大変光栄に存じます。

近年、広範囲の顎骨欠損に対する間葉系幹細胞などの骨原性細胞移植による骨再生医療の開発が研究されています。その中でも、顎骨骨髓由来間質細胞 (MBMSC) は歯科医師にとって比較的容易に採取可能なことから、歯科領域における骨再生医療の有用な細胞供給源となります。しかし、採取した MBMSC の骨形成能は個体差が大きく、MBMSC による骨再生治療を成功させるには、移植前に細胞の持つ骨形成能力を把握しておくことが重要です。そこでわれわれは MBMSC が細胞外に分泌する分子の発現パターンを指標とした骨分化能判定法について検討しました。まず、MBMSC の *in vitro* での骨分化能試験と *in vivo* での骨形成能評価を行ったところ、それぞれの結果は必ずしも一致しないことが明らかになりました。次に ELISA 法により、未分化 MBMSC の培養上清中へのタンパク質の分泌量を調べたところ、CHI3L1 の分泌量が多いと *in vivo* での骨形成能が低く、CHI3L1 の分泌量が少ないと *in vivo* での骨形成能が高い傾向にあることが明らかとなりました。本研究の結果から、CHI3L1 は MBMSC の骨形成能力を判断するためのネガティブマーカーとして活用できる可能性が示唆されました。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました鹿児島大学大学院口腔顎顔面補綴学分野の西村正宏教授、末廣史雄講師をはじめ、多大なる御助言や御協力を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。





## 第 130 回記念学術大会 課題口演優秀賞



### 稲用友佳 (医歯大)

歯科補綴学教育におけるデジタル・リモートでのアクティブラーニングの学習効果

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会において課題口演優秀賞を賜りましたことを、大変光栄に存じます。

コロナ禍において、ラーニング・マネジメント・システム (LMS) を活用した教育のデジタル化の重要性がさらに増えています。一方反転授業などのアクティブラーニングは、学習効果を上げる医学教育法として注目されています。当分野では 2013 年度より部分床義歯補綴学に LMS を利用した反転授業を導入し、2017 年度から 3 年計画で反転授業の学習効果を検証するランダム化比較試験を実施しました。また 2020 年度はコロナ禍のため、完全遠隔で反転授業を実施し、学習効果を検証しました。その結果、部分床義歯補綴学の知識導入に関して、反転授業は講義授業よりも学習効果が高く、教育における eラーニングを利用した個人学習の習慣が知識導入に有効であることが示唆されました。さらに遠隔でのグループワークは、対面よりも高い学習効果を得られる可能性が示唆されました。ポストコロナでは大学での知識習得を目的とした従来の対面授業に変革が起こることが予想されます。本研究の結果が今後の歯学教育のデジタル化において、少しでも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、本発表に際しご指導を賜りました部分床義歯補綴学分野の若林則幸教授、笹木賢治准教授、河野英子助教、ご協力いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



### 小原大宜 (昭和大)

オクルーザルスプリントを用いた振動フィードバック刺激の睡眠時ブラキシズム抑制効果

この度は、日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出いただき、大変光栄に存じ

ます。

睡眠時ブラキシズム (SB) により生じる過大な咬合力は顎口腔系にさまざまな為害作用を及ぼすため、臨床ではオクルーザルスプリント (OS) 療法が選択されることが一般的です。しかし、それだけでは SB を抑制することはできず、重度の SB 患者ではそのスプリントさえも破壊してしまうことがあります。そこで我々は振動刺激を用いたバイオフィードバック療法に着目し、通常用いる OS 内に感圧フィルムを埋め込み、スプリントのひずみに対応して OS へ振動刺激が付加される仕組みの装置を開発し、その SB 抑制効果を検証しました。結果として振動刺激は、睡眠を障害することなく 60% 前後の SB 抑制効果を示し、本来 OS が有する歯列保護効果と組み合わせることは臨床的に非常に有用であり、SB の管理に有効な方法であることが示唆されました。しかし、顎関節症状などの臨床徴候がある患者に対しての改善効果は不明のため、今後はそのような患者に対して本装置を適用した際の効果を明らかにする必要があると考えております。本研究の結果が、SB に悩まされる患者や歯科医師の診療の一助となれば幸いです。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました馬場一美教授をはじめ、多大なる御助言や御協力を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



### 異秀人 (大阪大)

iPS 細胞スフェロイドサイズに着目した新規骨再生技術の開発

この度は第 130 回日本補綴歯科学会記念学術大会におきまして課題口演優秀賞に選出いただき、大変光栄に存じます。

近年、iPS 細胞による再生医療研究が活発に行われています。しかし、未だ iPS 細胞由来の骨再生技術は実現しておりません。そこでわれわれは、近年注目されている微細空間マイクロウェルプレートを用いた iPS 細胞塊 (スフェロイド) 作製技術に着目し、iPS 細胞スフェロイドのサイズ制御、それらの構造観察、および得られる骨芽前駆細胞の骨芽細胞への分化能を検討しました。その結果、内部にアポトーシス陽性細胞を認めた最大径のスフェロイドが骨芽細胞特異的遺伝子を高発現しており、それは分散培養後も認められ、さらには細胞外基質の石灰化も有意に促進することが明らかとなりました。また、スフェロイドサイズの違

いにより発現するタンパク質も異なることが明らかとなりました。この研究成果により効率的な骨芽細胞分化誘導が可能となり、今後、iPS細胞スフェロイド技術を基盤とした効率的な骨増生術に繋がることが期待されます。

最後になりましたが、本研究の機会を与えてくださいました、大阪大学大学院歯学研究科クラウンブリッジ補綴学分野の矢谷博文名誉教授、石垣尚一准教授、直接研究をご指導いただきました萱島浩輝先生をはじめ教室員の方々、ならびに、研究の進め方に有益なご助言をいただきました東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野の江草 宏教授に厚く感謝申し上げます。

### 第130回記念学術大会 デンツプライシロナ賞



#### 大木郷資 (九州大)

臼歯部咬合支持は高齢者の起立動作能力の維持、向上に有効である。

この度は、第130回日本補綴歯科学会記念学術大会において、デンツプライシロナ賞に選出いただき、大変光栄に存じます。

近年、わが国は超高齢社会を迎えており、要介護者の増加および介護者の高齢化が社会問題となっています。その原因となる「転倒」は高齢者の日常生活事故で最も多く、転倒リスクは、フレイルの状態にある高齢者に多く見受けられます。咬合支持の喪失がフレイル、オーラルフレイルの一因とされ、それに対する義歯治療の有効性が報告されているものの、咬合支持の有無や欠損補綴患者の治療前後でのフレイルやサルコペニアに関する身体機能への影響について不明な点が多いのが現状です。そこで、本研究では起立動作に着目し、臼歯部咬合支持の有無と部分床義歯治療が起立動作能力へ及ぼす影響について調査することとしました。その結果、起立動作能力に臼歯部咬合支持が大きく影響している可能性が示唆され、また咬合支持の喪失に対する義歯装着が、口腔機能のみならず起立動作能力向上の一助となる可能性が示唆されました。今回受賞させていただきましたことを励みに、今後も研究成果を積み重ね、さらなる補綴治療の意義を示せるように研鑽を積んでいく所存でございます。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、ご指導を賜りました九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座の古谷野 潔名誉教授、鮎川保則教授、荻野洋一郎准教授、また、ご助言をいただいた多く先生方に厚く御礼申し上げます。



#### 大國 峻 (岡山大)

一歯中間欠損補綴法の違いが生活隣在歯の予後に影響するか？一後ろ向きコホート研究一

この度は、第130回日本補綴歯科学会記念学術大会において、デンツプライシロナ賞に選出いただき、大変光栄に存じます。

一歯中間欠損に対する補綴治療オプションの違いが、欠損部隣在歯の予後に与える影響については不明な点が多い一方で、われわれの過去の研究では、治療法の違いではなく隣在歯の歯髄の生死が有意な影響を与えている結果を得ています。そこで、本研究では一歯中間欠損を有し、両隣在歯が生活歯である症例に限定してインプラント義歯 (ISD)、接着ブリッジ (AdB)、全部被覆冠ブリッジ (FCB) を装着した場合の補綴法の違いが隣在歯の予後に与える影響を検討しました。その結果、隣在歯の累積生存率は、ISDはFCBに対して有意に高く、AdBに対しては有意差を認めませんでした。欠損部隣在歯喪失の有意なリスク因子として、FCBであること、歯周ポケットが深いことなどが同定されました。本研究は、接着ブリッジと自立咬合負担を可能とするインプラントの隣在歯の予後を初めて直接比較し、同等の隣在歯の予後を示す可能性があるという新しい知見を導き出したものです。今後もさらなる臨床エビデンスの構築に努力して行く所存です。

最後に、本研究の遂行にあたりまして多大なるご指導、ご尽力を賜りました岡山大学大学院インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、前川賢治准教授、三野卓哉助教、岡山大学病院新医療研究開発センターの黒崎陽子助教、並びにご協力、ご助言を賜りました関係諸先生方に心より感謝申し上げます。



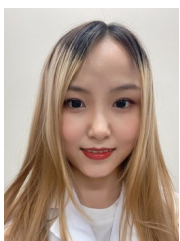




### 堀 裕亮 (九歯大)

口腔乾燥はインプラント治療のリスクファクターか？

この度は、公益社団法人日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会デンツプライシロナ賞に選出していただき、大変光栄に存じます。口腔乾燥は口腔環境に多大な影響を及ぼしますが、インプラント周囲組織への影響は不明であると言わざるを得ません。そこで本研究は、口腔乾燥モデルラットを用いて、口腔乾燥がインプラント周囲組織に及ぼす影響を解明することを目的としました。その結果、口腔乾燥のみではインプラント周囲組織へ悪影響は生じませんでした。プラークの蓄積に口腔乾燥を伴った場合、インプラント周囲歯肉の炎症、破骨細胞分化、インプラント周囲骨の吸収が増悪すること、さらに口腔乾燥によりインプラント周囲細菌叢が変化することが明らかとなりました。これらの結果から、プラークコントロールが良好であれば口腔乾燥はインプラント治療の明らかなリスクとならないが、口腔乾燥を有する患者においては、よりプラークコントロールに留意する必要があることが示唆されました。超高齢社会が到来している本邦において、口腔乾燥に罹患した患者へのインプラント治療、もしくは、インプラント治療をすでに受けた患者の口腔乾燥への罹患が増えると予想されるため、本研究から得られた結果は、重要な臨床的意義を有すると考えられます。最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導いただきました、九州歯科大学細川隆司教授、正木千尋准教授、近藤祐介講師、並びに貴重なご意見を賜りました多くの先生方に感謝を申し上げます。



### 林 暁雨 (大阪大)

開口障害の鑑別および治療効果の評価に資する筋電図学的指標の確立  
Electromyographic evaluation of limited jaw movement

この度は、日本補綴歯科学会第 130 回記念学術大会におきまして優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）に選出していただき、大変光栄に存じます。

本研究は、表面筋電図を用いて、開口障害の原因の鑑別、および閉口筋のストレッチ訓練療法の効果を客観的に判断可能かどうか予備的に調査したものです。

開口障害を認めた顎関節症患者は表面筋電計を用いて、両側咬筋および顎二腹筋前腹の筋腹中央に筋線維と平行に双極表面電極を設置しました。閉口筋のストレッチ訓練は、1 名の術者が指導し、患者自身が手指にて開口を補助しながら最大開口位で 5 秒間保持し、手指を添えながら閉口するストレッチを 15 回行わせました。記録は、患者による訓練前および訓練後の自力最大開口運動各 3 回とし、いずれも最大開口位を 5 秒間保持させます。平均電位及び最大電位をノンパラメトリック法で比較しました。

その結果、開口中に閉口筋である咬筋の明確な活動を認め、開口制限に閉口筋が影響を及ぼしていることが示唆されました。また、閉口筋のストレッチ訓練により開口量が増加した際には、この筋活動の減少を認めたことから、咀嚼筋痛障害による顎運動制限改善のための客観的な評価に筋電図が使用できる可能性があります。

最後に、本研究に多くのご指導、ご鞭撻を賜りました、大阪大学大学院歯学研究科クラウンブリッジ補綴学教室の石垣尚一准教授、矢谷博文名誉教授、高岡亮太助教に心から感謝申し上げます。



### 納所秋二 (岡山大)

骨髄細胞が BMP-2, FGF-2 の骨形成能に与える影響の検討

この度は第 130 回日本補綴歯科学会記念学術大会においてデンツプライシロナ賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

近年、骨再生療法の分野で臨床応用が進められている Bone morphogenetic protein-2 (BMP-2) および Fibroblast growth factor-2 (FGF-2) について、われわれはこれまでに骨髄組織の存在下において、BMP-2 の骨形成能が抑制されること、また一方で FGF-2 の骨形成能が促進されることをそれぞれ異なった実験系で示してきました。骨髄組織がこれら成長因子の骨形成作用に何らかの影響を及ぼしている可能性が示唆されたものの、その詳細は不明のままです。本研究では、骨髄組織の豊富な環境における BMP-2 移植による破骨細胞の発現と骨形成の抑制、FGF-2 移植による骨芽細胞の発現と骨形成の促進を認め、一方で、骨髄組織の乏しい環境においては BMP-2 移植による骨芽細胞の発現とそれに伴う骨形成の促進を認めましたが、FGF-2 移植による骨形成は認めませんでした。本



結果は、移植部位の骨髄組織の存在を考慮した両成長因子の適用が骨再生療法において重要である可能性を示唆しています。

最後に、本研究を遂行するにあたり、多大なるお力添えをいただきました岡山大学インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、分子医化学分野の大橋俊孝教授、大野充昭准教授をはじめとする関係の諸先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



### 伊藤和花菜 (東北大)

地域高齢者における口腔保健指標と転倒による骨折発生との関連

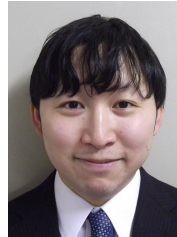
この度は、第130回日本補綴歯科学会記念学術大会において、優秀ポスター賞(デンツプライシロナ賞)に選出していただき大変光栄に存じます。

高齢期における転倒による骨折は、不時の入院発生に繋がることに加え、続発する廃用性委縮、生活機能の低下、ひいては死亡発生とも強く関連することが知られています。転倒については残存歯数や咬合支持、咬合力など種々の口腔保健指標と関連することが報告されていますが、地域高齢者を対象に転倒による骨折発生と口腔との関連を調べた研究はほとんどありません。本研究では、70歳以上地域高齢者を対象とした前向きコホート研究により、口腔保健指標と転倒による骨折発生との関連を検討しました。その結果、交絡因子を調整したうえでも、両側臼歯部咬合支持の喪失および現在歯数の低下と転倒による骨折発生との関連が明らかになりました。この結果は、歯列の欠損形態によっては、その進行の早い段階で転倒による骨折リスクが高まる可能性を示唆しています。今後は、これら口腔保健指標と転倒による骨折発生を繋ぐ機序について、統計的因果推論などを用いて明らかにしていきたいと思っております。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導をいただいた東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野・服部佳功先生、大井 孝先生、小宮山貴将先生、貴重なご意見を賜りました同医局の先生方に厚く御礼申し上げます。



## 第130回記念学術大会 カボデンタル賞



### 五十嵐憲太郎 (日大松戸)

COVID-19 状況下における有床義歯補綴学実習の取り組みと学修効果の検討

この度は、日本補綴歯科学会第130回記念学術大会カボデンタル賞の受賞を大変光栄に存じます。

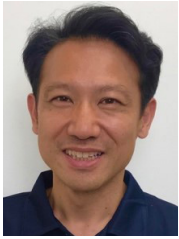
COVID-19 は歯学教育において、オンラインによる遠隔授業の併用をもたらしました。一方、手順や器具操作の修得を行う実習はある程度、対面形式の実施が必要となります。当講座では以前より動画教材を用いた反転学習による実習や、高学年まで継続して活用できる学修ポートフォリオを導入して主体的な学修を促す方法を検討して参りました。

COVID-19 を機に、「密」を避けるために実習室は人数を半分とし、実習を行うグループと演習等を行うグループに分けました。教育資源として実習は新たに製作した動画教材を動画共有サービスで公開して活用し、実習中にも閲覧できる環境としました。また、演習は教室で動画教材やポートフォリオによる予習や振り返りを促し、担当教員とディスカッションが行えるようにしました。

本発表では、これらの資源を用いた学習方略の学生・教員に対する学修・教育効果について、アンケートで回答を収集し、自由記載のテキストマイニングで解析を行ったものになります。その結果、常時閲覧可能な動画教材を用いた学修は学修効果が高く、実習での活用およびポートフォリオによる振り返りを通じて有床義歯の製作過程の修得に有効である可能性が示唆されました。

ご指導いただきました日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座 河相安彦教授ならびに講座員の先生方に厚く御礼申し上げます。



**岡本 信 (中国・四国支部)**

口腔内スキャナーとバーチャル咬合器を用いたチェアサイドにおける早期接触の検査法

2006年に岡山大学を退職し、福山市にて開院した後も、可能な範囲で臨床研究を続けてまいりました。全部床義歯の人工歯排列に関する発表によって、2013年にデンツプライ賞、2017年にはカボデンタル賞を受賞することができました。そしてこの度、2度目のカボデンタル賞受賞の栄誉に浴することになりました。私のような一臨床歯科医の拙い発表に対して、このようにご評価をいただき、大変光栄に感じております。ありがとうございます。

歯科医院を運営しつつの臨床研究といえますと、皆さんから「すごいですね。」「大変ではないですか？」

などと言っていただけます。しかしながら、自分のやりたいことを実行し、結果をすぐに臨床に落とし込むことができ、お金も自由に使うことができますので、自分にとっては理想的な環境だと感じております。臨床と研究が歯科医学発展の両輪だと思います。一般臨床医から発信できることはたくさんあるはずです。大学と一緒に歯科界を盛り上げて行けたら嬉しいですね。

今回の発表は、模型咬合検査（いわゆるリマウント）をデジタルで行う方法です。従来と比べ、技工操作を省くことができ、印象圧による影響が無く、有用な手法と考えております。有歯顎、部分床義歯、全部床義歯など幅広い症例に適用することが可能です。「バーチャルマウント」と名付けて、症例を増やしているところです。簡単ですので、ぜひ臨床でお試しいただければと思います。

**【投稿募集】**

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、公益社団法人日本補綴歯科学会事務局（jpr-edit01@hotmail.com）まで、メールにてお寄せください。

## 補綴関連講座・分野新教授紹介



### 佐藤利英

日本歯科大学新潟生命歯学部  
医の博物館  
2021年4月1日就任

本年度4月1日付で、日本歯科大学新潟生命歯学部医の博物館の教授を拝命しました佐藤利英でございます。

本試面をお借りして、日本補綴歯科学会会員の皆様にご挨拶申し上げます。私は日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第1講座の小出 馨教授のもとで約20年ご指導いただきました。その間、有床義歯に付与する咬合に関する研究や咀嚼機能評価、顎機能等について研究を行ってきました。また学会を通して、多くの会員の先生方と知り合うことができ、いまでもご指導いただいております。

就任先の「医の博物館」ですが、本邦で唯一公的に認められた医学・歯学・薬学に関する史料を約5,000点展示・保管する博物館で、平成元年に本学新潟生命歯学部内に設立されました。平時では年間4,000人ほどの見学者が来館されます。3年前には専任准教授になっており、この度医学史・歯学史の専門の教授として教育・研究を行うこととなりました。

ただし、これまで同様に部分床義歯・全部床義歯・顎口腔機能診断学や運動制御学など補綴学関連の講義や実習などは継続しており、学会を通して新しい情報を教育に取り入れながら活動していきたいと思っております。

浅学菲才ではありますが、日本歯科大学の発展のため、臨床・教育および研究に一層精進致します。今後とも何卒倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。末筆ながら日本補綴歯科学会のみますますのご発展と会員皆様のご健康を祈念して、就任の挨拶とさせていただきます。



### 笛木賢治

東京医科歯科大学  
大学院医歯学総合研究科咬合  
機能健康科学分野  
2021年9月1日就任

このたび、東京医科歯科大学咬合機能健康科学分野の教授として分野長に就任した笛

木賢治と申します。よろしく申し上げます。

国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科では、従来の補綴装置ごとの教育内容に基づく分野構成（部分床義歯補綴学分野、摂食機能保存学分野、高齢者歯科学分野、インプラント・口腔再生医学分野、顎顔面補綴学分野、スポーツ医歯学分野）から、「歯科補綴学に関連する研究内容に基づく構成」に変更する方針に従い、補綴系分野を4分野（教授）；咬合機能健康科学分野（笛木賢治）、口腔再生再建学分野（丸川恵理子）、生体補綴歯科学分野（若林則幸）、高齢者歯科学分野（水口俊介）に再編しました。

咬合機能健康科学分野では、補綴治療による咬合と咀嚼機能の回復／保全と全身の機能／健康増進との関連についてのエビデンスを明らかにする研究を担います。さらに、ビッグデータを基盤とした次世代の歯科医療を確立することを目指し、人工知能による歯科診断と補綴装置の設計システムの開発、データサイエンスを推進したいと考えています。

口腔再生再建学分野では、インプラント補綴学の高度な発展、および顎骨の再生とこれによる再建を取り入れた歯科補綴学の新たな展開、生体補綴歯科学分野では、生体材料の補綴臨床への応用を見据えた理工学的・生物学的評価と、これに基づく診療技術の推進、高齢者歯科学分野では、高齢者の口腔と健康の増進を探究する研究、およびそれに基づく教育、をそれぞれ担います。咬合機能健康科学分野は、これらの補綴系分野との連携を図り、歯科補綴学発展のため邁進する所存です。







### 金澤 学

東京医科歯科大学  
大学院医歯学総合研究科医歯  
理工保健学専攻口腔デジタル  
プロセス学分野  
2021年5月1日就任

口腔デジタルプロセス学分野は歯学部口腔保健工学専攻(歯科技工士を育成する専攻です)の分野となり、デジタルデンティストリーに関する研究、教育、臨床を行う分野として設立された分野になります。

私は2002年東京医科歯科大学歯学部を卒業し、臨床実習において全部床義歯の難しさを痛感し、全部床義歯補綴学分野の大学院に進学し、インプラントオーバーデンチャー(IOD)の研究を行いました。大学院終了後に全部床義歯補綴学分野から改組された高齢者歯科学分野(水口俊介教授)にて、医員、助教、講師を務めました。高齢者歯科学分野では臨床研究を、特に無歯顎患者や高齢者を対象とした、全部床義歯やIODを導入とした臨床研究を行ってまいりました。日本大学松戸歯学部の河相安彦先生にご紹介いただき、2013年にはカナダのモントリオールにあるMcGill大学にてVisiting professorとしてIODの臨床研究を行いました。2016年には京都で行われたIJP-JPS Workshop for Young Prosthodontist Educatorsに参加し、英語での意見交換をしながら、切磋琢磨できたのは良い思い出です。この時に学外の同世代の日本補綴歯科学会会員の皆さんと知り合うことができ、今でも良い交流を続けています。

近年のデジタルデンティストリーの普及においては、歯科技工士とデジタル機器の役割が年々大きくなってきています。歯科技工における技能はデジタル化されることにより、標準化・均質化がなされていき、また作業効率も上がります。これにより、歯科技工士の遂行する業務や作業環境も大きく変わろうとしています。この新しいデジタル化された歯科技工士の時代に対応できるように、歯科技工士教育を行っていく所存です。今後は、歯科医師、歯科技工士、デジタル機器・ソフトをシームレスに連携し、国際的に歯科界をリードするような仕事をしていきたいと思っております。本学は、1929年に設立された東京高等歯科医学校技工手養成科から続く、歴史ある教育機関です。歴史を継承するとともに、新しい時代に即したより良い研究・教育・臨床を行えるように張り切って頑張りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願いたします。



### 星 憲幸

神奈川歯科大学  
教育企画部(クラウンブリッ  
ジ補綴学分野併任)  
2021年4月1日就任

本年度より、神奈川歯科大学に新設されました教育企画部の副部長並びに教授を拝命いたしました星 憲幸と申します。今回、本紙面をお借りしまして日本補綴歯科学会会員の皆様にご挨拶させていただく機会をお与えいただきまして感謝申し上げます。

私は、2001年に神奈川歯科大学顎口腔機能修復科学講座補綴学分野(豊田 實教授)に助手として入局し、その後は、クラウンブリッジ補綴学分野(木本克彦教授)の設立と共に、臨床・研究・教育のお手伝いを行わせていただきました。現在は、教育企画部とクラウンブリッジ補綴学分野の併任、並びに神奈川歯科大学附属病院の副院長として、また日本補綴歯科学会では広報委員会の委員並びに西関東支部の支部長として業務にあたらせていただいております。

教育企画部では新たな歯科教育システムの構築を、クラウンブリッジ補綴学分野では学部生の教育と大学院生の指導、病院ではデジタル歯科診療科の一員として診療に当たらせていただくと共に若手育成と専門医育成に努めております。研究面としては、デジタル技術を用いた新技術の開発、新規歯科材料の開発、光触媒技術の応用、補綴治療と唾液の関連性を中心として口腔内の症状や認知機能への影響の研究を引き継ぎ行っております。

今後は、神奈川歯科大学並びに日本補綴歯科学会の益々の発展のために、粉骨砕身の覚悟で臨む所存です。皆様方へのお礼と共に今後ともご指導を頂戴したいと存じますので、宜しく願いたします。



**木本 統**

愛知学院大学  
高齢者・在宅歯科医療学講座  
2021年5月1日就任

令和3年5月1日付けにて  
愛知学院大学歯学部高齢者・  
在宅歯科医療学講座主任教授  
を拝命しました木本 統で

ございます。この歯面をお借り致しまして、教授主任のご挨拶を申し上げさせていただきます。私は、日本大学松戸歯学部にて、故加藤吉昭教授、小林喜平教授、河相安彦教授に、全部床義歯の臨床・研究について、ご指導いただいた後に本学に赴任いたしました。ご指導いただきました先生方に深く御礼申し上げます。

愛知学院歯学部高齢者・在宅歯科医療学講座は、昭和50年に川口豊造教授にて開設された補綴学第二教室の流れを汲みます。その後、服部正巳教授の時代には高齢者歯科学講座となり、時代と共に、講座が扱う領域と名称が変遷してきました。私は高齢者・在宅歯科医療学講座と名称を変えての初代の教授となります。教育では全部欠損補綴学、高齢者の歯科治療、インプラント歯科学に携わっております。研究面では、全部床義歯装着者の咀嚼能力、インプラント体の材料、顎関節部の運動様相を可視化、超音波オゾン洗浄装置の開発、金属アレルギーなどが研究テーマでした。これらのテーマに、私がこれまで取り組んできた、臨床研究を加え、患者様にフィードバックできる研究を行って行く所存です。

浅学非才の身ではございますが、補綴学の発展のために一層精励いたす所存でございますので、今後とも何とぞ倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。